学園の魔法使い（仮）

猫シャツ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、外国から帰国してきた一人の、ファイターの物語

ハーメルンを利用するのはこれが初めてなので優しい目で見てもらえると、有難いです。

目次

設定（ネタバレ注意）―――― 2
1話　帰国―――― 6
2話　問題―――― 10
3話　観戦―――― 14

設定（ネタバレ注意）

青崎蒼

性別・・・男の娘

誕生日・・・４月７日

血液型・・・Ａ型

身長・・・１６０ｃｍ（ネタバレ※これ以上伸びることはない）

学年・・・相棒学園中等部１年

年齢・・・１３歳

相棒・・・五角騎竜　砂杖のアルカイド

コアガジェット・・・魔法陣

星座・・・牧羊座

好きな物・・・バディファイト、家族、相棒

嫌いな物・・・科学者

蒼に対する印象

・優しいが、怒らすと怖い。怒らせた時は地獄だった

・友人
・ファイトしてみてー
・強者
・実けｎ（（（（
・世界大会優勝経験のあるバディファイター、現在は、水色が中心のオーバーサイズのチェックシャツ、紺色の短パン、黒色が中心のスニーカーといった服装を身に着けている
・友人との関係は良好
・母親と祖父と三人暮らしで父親は居ない、赤子の頃に父親の顔を見たが、どう言った顔だったかさえ覚えていない
・一度科学者に誘拐された経験があり、その事件以降科学者を嫌っている
・世界大会は一週間あるため、出るために一週間分の授業内容を全部終わらせてから出場した
・母親と祖父に育てられたため、母親と祖父を大切に思っている
・基本的に家の家計は母親が3割以上を占めているため、母親の体が不安なため、自分でやれることは出来る限り自分でやっている
・母方の祖父は存命中、祖母は蒼が赤子の頃にこの世を去っている、父方の方は不明

・幼少期の頃は、母親と同じ髪色だったが、成長していくにつれて、色が変化していった

青崎水優（あおざきみゆ）

・性別・・・女性
・誕生日・・・４月１１日
・血液型・・・Ａ型
・身長・・・１７０ｃｍ
・年齢・・・２５歳
・髪型・・・・灰色のロング
・瞳の色・・・パステルブルー
・星座・・・牡羊座（おひつじざ）
・好きな物・・・家族、（秘密）
・嫌いな物・・・息子を誘拐した科学者
・オリ主のお母さん。怒らすと怖いのは共通点。家の家計の３割以上が彼女と祖父の負担なため、祖父と共に心配されている
・オリ主に父親のことを話そうか迷っている
・最初は祖父に結婚するのを反対されたが、自力で認めさせたとのこと

・趣味は読書、
・青崎成藍（あおざきせいらん）
・性別・・・男性※元男の娘
・誕生日・・・5月5日
・血液型・・・　B型
・身長・・・１４０ｃｍ
・年齢・・・４５歳
・髪型・・・白髪のショートボブ
・瞳の色・・・翡翠（ひすい）
・星座・・・牡牛座《おうしざ》
・好きな物・・・家族、友人、相棒（バディ）
・嫌いな物・・・家族に手を出す輩
・最初は、結婚に反対してたが、娘の覚悟を見せてもらい、認めた
・母親同様、家計の3割以上を負担しているため、心配されている
・年齢的にはまだまだ現役な方
・祖母が生きてた頃は、頑固だったこともあったが、現在は丸くなっている
・相棒（バディ）がいたが、現在は解消している。たまに連絡を取っていたりする

1話　帰国

「まもなく、当機は○○空港に着陸します。
「んー、」
瞳を開けて目が覚める。
「キレイだなぁ、」
こうして飛行機は着陸した。
「確か、荷物はココに、、あった！」
荷物を受け取り、検査を済まして検問を通って行く。
空港を出てタクシーに乗る。
「・・・・まで」「かしこまりました。」
タクシーの窓から町を眺める。
「1ヶ月で町も大分変わったなぁ。」
高速道路を出て車道に入る。
「まもなく到着いたします。」
目的地に着き、運転手はタクシーを止める。

「料金はこちらになります。」
金を払い、タクシーを降りる。
「ありがとうございました。」
礼を言い、立ち去る。
そして、校舎を見て「ただいま、相棒学園。」
こうして、私の物語が、始まる。
「中等部に来たいいけど・・・」
今の時刻は、、

「8時かぁ、あっそういえば!」
確か友達から連絡で、
「ＡＢＣカップがあるから授業は休みだったの忘れてた。」
取り敢えずファイティングステージに向かうか、
「アルカイド、バディスキル、お願い出来る?」
コアデッキケースに入っている相棒に呼びかける。
「お呼びでしょうか。」
飛び出て来た薄水色の竜こそ、私の相棒(バディ)、

五角騎竜（ごかくきりゅう）　砂杖（さじょう）のアルカイド。
「うん、バディスキル、頼める？」
「分かりました。」
「ありがとう、いつも。」
　ナビ音声と共に左右対称に魔方陣が浮かび上がる。
　それと同時に、コアデッキケースも変化する。
「それじゃあ、行こう。」
「ええ。」
　こうして、相棒学園中等部を後にした。
「よーし、到着っと。」
「お役に立てたなら光栄です。」
　光栄って、そう言い、アルカイドはコアデッキケースに戻っていく。
「それじゃあ、行くか。」
　そう呟き、ファイティングステージの中に入っていった。
　中に入った先には、「凄い観客、」これだけの人がいる辺り、皆楽しみにしていたんだなぁというのが、伝わってくる。
「お、あれは。」

確か、今戦ってるのジンじゃん！、もう一人は、
「確か、えーと」思い出した。
黒岳テツヤ、だっけ？
初等部の子と最後にファイトしたのは1ヶ月前以上だから、何とも言えない。
「えーと席は、おっ空いてた。」
さーてと、ジンはこれからどう展開していくかなぁと。

おっ、これは、、決めに行く感じかな。
ジン「ファイナルフェイズ！」
ジンの必殺技、鬼道唐紅キター！
ジンもあの時からメキメキと実力を伸ばしているだろうから純粋にファイトする時が楽しみだなぁ。
すると、ジンがこっちに顔を向けて来た。

2話　問題

Ｔｈｅ．ｅｎｄ．ｗｉｎｎｅｒ　禍津ジンというナビ音声と共に勝敗が決まる。

その後、観客席を一通り見ると、
「蒼の奴、もう帰ってきたんか。」
そういえば、連絡で帰国するって言ってたっけなぁ。
まさか観客席に座って俺のファイト見ていたとは。
これは驚いたなぁ。もう帰国しとるとはなぁ。
「なぁ、メグミ」「何？」
メグミに伝える。
「葵の奴、もう帰ってきていたで。」「えっ!?」
「どうやら観客席に座って見ていたで。」
そう言い、ファイティングステージを後にするジンなのであった。
一方その頃、蒼とアルカイドは、
「ただいま～」

「ただいま戻りました。」
・・・家に帰ってきていた。
「お帰りー、海外生活一週間お着かれなさい。そして、、」
「世界大会、優勝おめでとう。」
この人は、青崎水優(みゆ)。
「ありがとう、母さん。」
私の母である。
「それで、外国での一週間はどうじゃったかの。」
質問をしてきたこの人は、青崎成藍(せいらん)。
私の祖父に当たる人物で、健康的に過ごしている。
「そうだなぁ、、」
外国でのことは、色々なことがあったからどれを話すか、迷う所が。
「フフッ、今じゃなくて大丈夫よ、後でゆっくり聞かせて頂戴。」
そう言い、母は料理の方に専念するように、キッチンの方に戻っていった。
料理が完成するまで、相棒《バディ》と部屋で話して待っているとしよう。
「母さん、アルカイドと部屋に居るねー」
「分かったわ〜」

母との会話を一旦終え、自分の部屋に行く。
「はぁ、、」
ため息を着く。
「どうかしましたか。」
「うーん、、」
白紙のカードを見つめて言う。
虹のような輝きを放つ白紙のカードを手に入れたのは
いいもののどうすればいいんだろう。
実際、知らない人から渡されたものを使っていいかも分からない訳だし。
「白紙のカード、ですか、」
「自分だけの答えを見つけろ、か、」
実際渡された時は、そんなこと言われたっけ、
「これから見つけて行くしかないか、」
ファイトしていたら答えが見つかるかもしれないし、
それ以前にまだ私は子供だ。
ゆっくりと着実に自分だけの「答え」を見つけていけばいい。
「蒼、アルカイドちゃん、ご飯出来たわよー。」

「ハァーイ！」
「イヤさっきとの空気の差！」
　細かいことはいいんだよー。
「とりあえずご飯にでもしようか。」
「ハァ、そうですね。」
「こーら、ため息ついていると幸せが逃げるゾ。コーラだけに。」

　部屋の中の空気が凍る。
「自分で言うのも何だけど、寒くなってきたね。」
「だったら最初から言わないでください。でも、」
「これはこれで少しスッキリしたでしょ。」
「それもそうですね。」
　一方その頃、どこぞのジョーカーさん。
「ハクシュッ！どこかで誰かが私のウワサでもしているのかな。」
※ウワサしていません

3話　観戦

ふと、夢を見た。それは、子が生まれた時の話。
人が竜に恋をし、竜も人に恋をしたお話
「オォ、」
「元気な子が生まれてくれて良かった。」
「ぴぇーん、ぴぇーん」
赤子が産声をあげる。
「よしよし。」
赤子をあやす親らしき人物。
「それで、名前はどうするんだ。」
「そうねー□□□何てどうかしら。」
「良いと思うぞ。」
「そうね、□□□□□□。」
記憶はここで終わっている。
「んー、、」

目が覚める。
「何だ、夢か、、、」
「考えていてもしょうがないか。」
2階から降りて、洗面台に行き、歯磨きを済ます。
「お爺ちゃん、お母さん、アルカイド、おはよう。」
「「おはよう。」」
三人におはようと言い、
一度上に戻り、私服に着替えようとすると、
「葵ー、ちょっとリビングに来てー。」
「ハーイ、今行くー。」
リビングに着くと、そこにはお母さんとアルカイド、お爺ちゃんがいた。
「呼ばれたから、来たけどどうしたんだろう。」
「どうやら蒼の母さんから渡したい物があるようです。」
「母さんから、お主に渡したい物があるそうじゃ。」
アルカイドとお爺ちゃんからそう言われる。
え、渡したい物って、
「改めて世界大会優勝おめでとう。」

母からプレゼントを貰う。渡したい物って、これのこと？
「ありがとう、母さん。」
「早速開けてみていいわよ。」
「え、いいの。」
そう言われ、中を開けてみると、そこには、水色を中心に青、黒、白で構成されたオーバーサイズのチェックシャツと、紺色の男性用の短パン、黒を中心に白、薄水色で構成されたスニーカーが入っていた。
「これは、大会優勝記念の、私からのプレゼント。」
「、、、ありがとう。」
「早速着てみてもいい？」
「ええ、いいわよ。それじゃあまずタグを取り外しましょう。テーブルの上に置いてある入れ物にハサミが入っているから今出すわね。」
そう言い、ハサミでタグを取り外していく。
そして、数分後、、、
「よし、タグの取り外しが終わったし、着てみて大丈夫よ。」
「うん、ありがとう母さん、タグを取り外してもらっちゃって。」
「いいのいいの、さぁ、早く着て朝食済ませちゃいなさい。」

朝食をまだ済ませてなかったことを思い出し、プレゼントしてもらった新しい私服に着替える。
「そういえば、アルカイドは、朝食どうしたの。」
「私はもう済ませておりますので、ごゆっくりどうぞ。」
「ありがとう、それじゃ、ひとまず朝食にしてくるね。」
台所に向かい、「いただきまーす。」朝食を食べ始める。
「そういえば、家に帰る前に相棒学園によってみたらＡＢＣカップやってた。」
「そうだったの。なら、今日の予定はＡＢＣカップを見に行って来る感じかしら。」
食べるのを、一回やめ、話し始める。
「うん、今日でＡＢＣカップ最終日だし、観戦しに行く感じになるかなぁ。」
実際、昨日は見れなかったし。
※蒼は昨日ＡＢＣカップを見に行けてない。
「あらっ、そうなの。」
「おや、そうなのか。」
「うん、そんな感じ。」
「母さんは仕事が忙しくて行けないから、私の分まで楽しんで来てね。」
「ワシも仕事があってのう、行けなくてすまん。」

「そう、でも、あまり無理はしないでね。」
実際、ウチの家計は大半は母さんとお爺ちゃんのおかげで成り立っている所があるし。
「フフッ分かってるわよ。」
「何々、今時の若者と比べれば元気じゃよ。」
分かってるなら良いんだけど、、、
「ごちそうさまでした。」朝食を食べ終える。
私服と一緒に新調したスニーカーを履いていく。
「それじゃあ、行ってきまーす。」
「「行ってらっしゃーい。」」
祖父と共に葵を見送る。
「貴方、、私達の息子は、あんなに大きくなったわよ。」
「お婆さんや、孫は元気にすくすく育っておるぞ。」
そう言い、空を見上げた。
そして、場面は一転し、ファイティングステージに到着する。
「よし、着いた。それじゃあ、中に入ろっか。」
「そうですね、行きましょう。」

ファイティングステージの中に入っていく二人。
「さーてと、何処の席に座ろっかなぁと、お、丁度良いとこ見っつけた。」
二人分の席を確保し、決めた場所に座る。
「おっ、今から始まるファイトは、、」
如月斬夜（きさらぎざんや）　対　未門牙王（みかどがおう）かぁ。
片方は、中等部を破ったこともあったから知ってたけど、もう一人の方は、知らない子だなぁ。
でも、あの子には、よく分からないけど、何かを感じる。
ひょっとしたら、あの子なら、、、
「どうしたのですか。」
「イヤ、何でもない。」
考えるのを一回止め、ファイトの観戦に集中する。
それにしても、「ジン達が見当たらないなぁ。」
こうして、ファイトは進み、、
「決断力のある子だなぁ。」
絶命陣をセットされているにも関わらず、必殺技を放とうとする。迷わず、自分の答えを選択する。本当に彼って初心者？

その瞬間、ファイティングステージに穴が出来る。
「あれは、、」
確か去年のＡＢＣカップ優勝者の轟鬼ゲンマと、、
もう一人は、生徒会長の、、やべっ名前忘れた。
おっ、ジン達見つけたっと。
前年優勝者ということで特別に参加を認めるって、此処まで来ると何でもありだなぁ本当、退屈しないで済みそうだ。
この祠堂孫六がお相手になりますって、思い出した。
祠堂孫六って名前だったっけ生徒会長の名前。

今年の大会は、一波瀾（ひとはらん）有りそうだ。
大会出場者の未門牙王も、これで俺も轟鬼先輩とファイト出来るぜって、成る程、会話から察するに、相手選手のためを思って友達に探して来てもらったのね。
今やってたファイトは一時中止し、生徒会長と前年優勝者の轟鬼がファイトするようだ。
両者とも、オープン・ザ・フラッグし始めたようだ。
おいこら、生徒会長。天才である僕でなければ、使いこなせないって、しかも、相手

が自分と同じワールド出した時驚いてるし、そういう所だぞ生徒会長ゥ！